

最終段；日本と中国が環境問題等で、“後世の幸せを願う” 価値観の共有で友好を願います。

現在日本には中国人居住者は 100 万人を超え、内 10 万人が帰化していると聞きます。また日本で生まれた中国人の子供も数万にいます。私は老いたので、本段の表題は日本国政府と若い日本人に託したいと思います。

従ってこれからは、余り中国に行かずに日本で腰を据えて、日本に居住する中国人が第 15 計～第 28 計を読んで、特に第 26 計の「感謝と良心」を理解してくれた若い中国人に「真の日本人」を紹介してビジネスチャンスの場を提供していきたいと願っています。

「最終段」の文体は「紀行文的随筆文」ではなく“我流”で書きます。また少し長くなるので章別で書きます。

“我流”とは文章を書くとき「起承転結」は下記の論法ですが

起：「京の三条」の糸屋の娘

承：姉は十六妹十四

転：諸国大名は弓矢で殺すが

結：糸屋の娘は眼（め）で殺す

“我流”は「起承転結」を無視して自由奔放で書くという意味です。現在日本は不況です。景気のいい時は「起承転結」でいいのですが、不景気の際は経営学でいう「ブレインストーミング (Brainstorming) が必要です。特に閉塞感を脱却するには必要です。ブレインストーミングはアレックス・F・オズボーンによって考案された会議方式のひとつで集団思考とも訳される。集団発想法、ブレインストーミング法 (BS 法)、ブレスト、課題抽出ともいう。1941 年に良いアイデアを生み出す状態の解析が行われた後、1953 年に発行した著書「Applied Imagination」の中で会議方式の名称として使用されました。

第一章 「専門語」、「一般語」と「感性語」

私の文章は理解が容易な箇所と難しい箇所があったかも知れない。

しかも話題が芥川龍之介の「杜子春」に出てくる中国の仙人が箒（ほうき）に乗ったような話と、ついつい好奇心で年甲斐もなく「孫悟空」

のように金団雲（きんとんうん）に乗って話が飛んでしまうからです。

難しい箇所は読み流して下さい。二回読めば少しは理解されると思う。三回読めば？また更に・・・読めば？必ず日本人も中国人も理解してもらえると確信しています。

何故なら、言葉には“専門語・一般語・感性語”があるからだ。“専門語”は専門家が使用する言葉であり、“一般語”は普通のサラリーマン・主婦が使う言葉であり、“感性語”は文学者とか子供が感じたまま使う言葉です。例えば「氷が解けたら何になりますか？」の問いに多分専門家は“H₂O”と答える、一般語の人は“水になる”と答えると思う、感性語の人は“春になる”と言うかもしれない。

読む人にも色々な立場と年齢と価値観の異なる人もあると思う。また敢えて意図的に重複させた箇所もある。それと書くジャンルが広すぎたかも知れない。私は本当に、私より年下の政治家を含め日本人に頑張ってもらいたいと思って書きました。平和な日本の未来を託したかったからです。

それと、私は現在販売されている中国に関する書籍を全く参考にせず、過去の自分の学習の資料と過去に読んだ書籍の記憶と人生体験と客観的観察だけで限られた時間で一気に書きました。従って多少の誤字脱字があるかも知れない。

時折、テレビ・新聞を見て私より年下の日本の政治家の発言、また番組での評論家・学者・専門家の発言の“無責任”さ、“行動力・決断力”のなさ、更に見識のなさに驚きました。実体験なく“自己の常識”での無責任な発言には日本国の未来を憂（うれ）うし、歯がゆさを

感じるものです。「言うは易く対策は難しい」ということです。

第二章 鄧小平の娘さんは国家に献身した画家でした。

私は鄧小平さんの娘さんの鄧林さんの画（え）も見ています。中国が苦しい時、鄧林さんが必死に画（え）を画（えが）き、必死に中国を助けました。その時、鄧林さんの絵を買ったのは、広島にある中川美術館の館長の中川さんである。ある人の息子さんの結婚式で中川さんは言いました。「人間と動物の違いは、人間は泣くことも笑うことも出来るが、動物は泣くことが出来ても笑うことが出来ない。」と言いました。

下の画（え）は私が 55 年前の 10 歳の頃の水彩画です。画（え）の先生は当時「日展」の審査員でもあった高須国之先生で服飾デザイナーで有名な“コシノヒロコ、コシノジュンコ” 姉妹も習っていました。

私の隣で“コシノジュンコ”さんが“ミロのビーナス”のような題材と向き合い“黒墨”で画用紙にデッサンしていました。



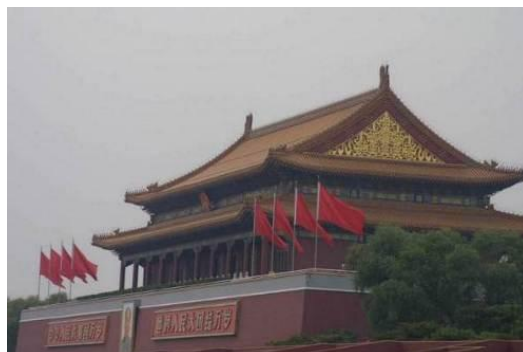
私は色弱ですが美術館で絵画を見る時、画のベースの色は何かでそ

の時の画家の心理を推察します。

鄧林さんの絵は北京の空のような灰色がベースでした。灰色の上に白（無心・引き立て）・青（清らかさ）・紅（熱情・革命）・黒（強調・区別）・緑（生）で描かれていました。灰色ベースは心が辛い・物悲しい時に使用する色です。私は茶色に黄色を混ぜれば黄土色であるとか、おいしい柿は赤と黄色と白色を混ぜるといふ事は知っていました。要するに画（え）を書くという事は「仮想・写真(現実の光景)と料理(表現方法)がミックス」したようなものです。中々自分の気に入る料理が作れない(画が描(えが)けない)のです。太公望は「あほ」を画(えが)くのに「(魚)釣り人」の画(え)で表現しました。

対象物の形を重視するか内面の心を重視するかの違いです。“コシノジュンコ”のデッサンは形を重視、私の画(え)は心を重視です。

心を重視の画(え)は「老いたカラス黒色の濃度で区別、賢いカラス、あほなカラスの区別は足の色を何色すればよいのかな？」です。



第三章 温賀宝首相の律儀（りちぎ）

私は、温家宝首相は親日派であると書きました。彼の下記のスピーチを参考にして下さい。

温家宝総理 日中友好 7 団体・華僑華人 4 団体共催歓迎晩餐会でのスピーチ
2010 年 5 月 30 日 19:30 東京 ホテルニューオータニ 鶴の間

皆さんこんばんは！私は原稿でのスピーチには不慣れです。私は、心で語りかけることが、聞く人にとっても、もっと受け入れやすいと思います。ですから今晚の話は、何の下準備もしていません。でも私の心からの話です。

3 年前、それは春のことでした。私は貴国を訪問しました。人々は「氷を融かす旅」と呼びました。たいへん難しい訪問になるだろうとわかっていましたので、私は長い時間をかけて準備しました。でも、誠意をもって来ようと思いました。誠意は、準備よりも大切です。

国会でのスピーチの際、私は 11 回の拍手を聞きました。話終えて壇上から降り、会場から遠く離れても、まだ拍手が聞こえていました。私は心の中で、人の心や、良心は、お互いに通じ合えるのだということを感じました。

宿舎に戻り、私はまず母に電話しました。何故母に電話したのでしょうか。そのわけは、母は抗戦（日中戦争）を経験したからです。母が

私のスピーチを理解してくれれば、私も安心できるのです。母は私に「とても良い話だった」と言ってくれました。中国国内でも、私のスピーチは好評でした。

私が忘れられないのは、日本の市民の方々との交流です。早朝、代々木公園で会った日本の市民は、私にとっても好意的でした。東京から京都に向かう途中で、沿道にたくさんの日本人の方々が、自発的に立ち、私に向かって手を振ってくれました。私は、友誼（ゆうぎ 友情）は回復させることができ、しかも更に発展させていくことができるのだと感じました。

帰国後、日本で出版された本「35号投手温家宝」を手に入れました。私が立命館大学で、学生と野球をしたからです。

私が、日本の人々から学んだことは — 関係者や学生達がたくさんの準備をされていたということです。私に背番号 35 のユニホームを用意したのは、日中国交正常化 35 周年を表しています。また、この本の編著には、日本人の他に、多くの華僑、華人がかかわり、中国語版の作成には、翻訳家ではなく、自分たちで翻訳者を探したそうです。細かいところまで、いろいろ配慮が行き届いていたのです。

日中両国の遊戯と協力を発展させるために重要なことは、相互信頼

の関係を樹立することです。人と人、国と国いずれも同じです。相互信頼があつて、はじめて相互理解ができます。相互信頼があつて、はじめて誤解を解くことができます。

日本訪問にあたり、私は2回、小さな試みをしました。第1回るとき、「3丁目の夕日」という映画を見ました。DVDで見たのですが、そこには50年代の日本の人々が、刻苦奮闘している様子が描かれていました。今回は、文字通り「超多忙」の中 — 決して誇張ではありません — 、オスカー外国語映画最優秀賞を受賞した「おくりびと」を見てきました。この映画は生と死を扱ったものですが、そこには倫理、道徳観念や東洋の文化が色濃く反映されていて、最後までたいへん興味深く見終えました。

現在、中日両国間にはまだ多くの未解決の問題が残されていますし、矛盾もあります。また、日本の人々と中国の人々の間には、まだ相互理解できていない点もあります。でも、私は新聞の世論調査とやらは信じません。私は、まごころはすべてを変えられることができると信じています。私たちは、互いを理解しあい、その為にまだ沢山のことをし、友好を深めていかねばなりません。

中国は平和的発展、調和のとれた発展、持続可能な発展の道をとって
いくことを確定しました。中国は貧しくても、いかなる他人も威嚇
しません。発展しても、やはりいかなる他人も威嚇しません。中国は
永遠に、覇を称えることはありません。日本は、戦後、平和的復興の
道を歩んできました。今後もその道をたどっていくことを願っていま
す。それは日本に繁栄と、平和をもたらしてくれるでしょう。歴史問
題に触れることを恐れることはありません。なぜならそれは客観的な
存在だからです。

1895 年の馬関条約（下関条約）で、中国は台湾を割譲しました。そ
こで、丘逢甲という人が詩を書きました。自分の血と涙で書いたので
す。「四万万人同一哭 去年今日割台湾」と。

私たちは、歴史を鑑（かがみ）とし、未来に向かう、と主張していま
す。恨みをずっと続けることは絶対にしません。あのことは、少数の
軍国主義者がしたことであり、日本の人民もその被害者なのです。

私は秦皇島から日本の百万の軍民が帰国の途についたとき、現地の
人々が、家から食べ物を持ち出して、軍人たちに分け与えたことを知
りました。たった一つしかないミカンを差し出した者もいたそうです。
彼らが無事に家に帰れるようにとの事です。

去年、日本の残留孤児の代表団が中南海に私を訪ねてきました。そして、涙を流しながら歌を歌いました。「私にはふたつの家がある。ひとつは東瀛（とうえい 日本）、ひとつは中華（中国）に」私は聞きながら、涙が出るのを止められませんでした。

私たちは、世界金融危機へ対処しなければならない時にいます。また、政治、経済の大変革の時期にいるのです。両国は友好的に、共に手を携（たずさ）えて、同じ舟で共にわたり、難局を乗り切っていくかねばなりません。両国の合作の分野は大変広く、共同してあたっていくべき分野はたくさんあります。相互信頼を深め、協力を強化しさえすれば、固い戦略的互惠関係を築くことができるのです。

話が長くなりました。あまり大したことを話したわけではありませんが、冗長にならないよう、このへんで結びとします。前回、訪日の際、私は漢俳を一句詠みました。春のその日はちょうど雨でした。また、春とはいえ、桜はまだ満開前でした。私は詩人ではありませんが、次のような句を詠みました。

春風（和風） 細雨に化し

桜花 艶を吐いて朋友を迎ふ

冬去りて 春来る早し

今日はもう一句詠みました。どうか笑わないでください。私は、3年の時を経て、中日友好協力関係は発展し、前途はとても明るいと思います。

融氷（ゆうひょう）春水（しゅんすい）と化し 融けた氷は春の水となり

雨過ぎて、青山（せいざん）、分外（ぶんがい）に翠（みどり）なり

雨後の山々は一層緑を濃くしている

大地 威蕤（いずい ゆり科の多年草の名前）を生ず。大地からは勢い良く草木が伸びてきた

ありがとうございました。（筆記から整理 文責：日中経協・中島）

第四章 日本が中国に協力すべきは環境問題と日本料理

私は、日本が中国に協力すべきは「環境問題」と「日本料理」と思っています。

（I）私の顧問先の〇社長が“上水の特許を取得した”世界 16ヶ所に特許申請を出願し、日本、国際特許機構、台湾、最近アメリカで特許を取得した。私は本年7月北京で中国科学院の“〇”博士と“北京”、黄河の下流の“東営”と揚子江の下流“南通又は杭州”で実証実験の三か所合意書に立ち会ったのである。このことは、日経産業新聞の一面にも掲載されています。

水処理技術研究所
急速ろ過型浄水
導入費を3割減

環境装置ベンチャーの水処理技術研究所(東京・杉並、落合寿昭社長)は、装置の初期導入コストと運転管理時に必要なコストを従来技術に比べて3割減らせる浄水システムを開発した。凝集剤の投入量を減らすなどしてプロセスを簡易化、設備メンテナンスの費用も低減した。水道インフラ整備が加速する中国などに売り込む。

水質浄化装置は急速ろ過と呼ばれるタイプ。既存のシステムは原水を攪拌(かくはん)することによって不純物を凝集・沈降させる。この装置は、攪拌機を省き、ろ過膜で不純物を除去する。凝集剤を投入する必要はない。また設備のメンテナンス時にはたまった凝集剤を洗い流す手間もかかる。

水処理技術研究所は攪拌機の数を既存製品の3〜4倍に増やすことで、水中の不純物の凝集密度を上げ、凝集剤の投入量を7〜9割減らすことに成功した。これによって沈殿池などの機構が不要になり初期導入コストを3割減らせる。また凝集剤投入量を減らすことで装置メンテナンスコストも3割程度減らせる。

新製品は今後中国で性能の実証を進める。政府系研究機関、中国科学院と装置の開発・実証を協力して行うための協定書に調印した。2011年秋に日懸100ト程度の水処理能力の実証プラントを中国国内で稼働。1年程度の実証を経て商品化する。日懸1万トの水処理能力なら装置の価格は10億円前後になる見通しがある。(1) 水処理技術研究所

この日経産業新聞には二か所誤りがある。一か所は「新製品」ではなく「新技術」である。もう一か所は「2011年晩秋である」は「2010年晩秋」2010年12月に私が北京に行くのです。何故なら、現在兵庫の三木市の工場で実験プラント設備を製作中なのです。(少しのびる)

(2) 天津市では、中国で生産された米(戦前日本から満州・蒙古開拓団約27万人が開拓した土は“黄土”ではなく“黒土”)で出来たコメは日本の米と同じで水も清流に近く逆浸透膜で軟水化に成功している。従って日本国内で造る日本酒と同じ品質の酒を中国国内で造る技術を開発したN酒造の若きN社長(日本人)も生産設備拡大の為応援しなければならない。彼は、1995年に中国に単身で行った。元商社マンで中国語も話せ中国国内法にも精通しているし早稲田の法学部を卒業している。今まで私が出会った日本人で彼ほど現役の中国通は見たことがない。私が彼の“中国通”については、私は自信をもって品質保証を与えることが

出来ると思います。“若社長の珍中国日記（著者；中谷正人、発刊元；蒼蒼社）“中国での日本酒名は”朝香（あさか）“です。「日本料理」と「日本酒」日本文化の”一対 いったい セット“の食文化です。

第五章 炭化技術とシックハウス（病の家）→危機管理

“新炭化技術”の特許も日本にあります。下の写真は中国の炭化技術です。炭化温度 500 度までの窯です。燃料炭とか除湿には有効でアミン系の臭い（オシッコの臭い）には有効ですが、炭化温度 800 度～1000 度での発癌性のホルムアルデヒド系とか神経障害を引き起こすフェノール系（シンナー系）には中国の窯では構造上無理です。



また中国の医療問題についても（中国は軍事設備でGDPを上げるのではなく）中国の医療施設の改・善室内の空気の改善等でGDPを上げるべきだと思います。

中国は木材が無くて困っています。日本は木材がありすぎて困っています。中国には木がなく空気も悪い。“シックハウス(病の家)”問題が続出しています。中国の環境問題は世界の環境問題でもあります。

今年の夏の猛暑はモンゴルの大草原の草も被害にあい、羊も食べるものがなく困っているそうです。綿花も被害にあい価格が三倍になり中国は日本への安価なタオルも輸出出来ないのです。私は本年 9/11 日上海で内蒙古政治協商会議の議員から直接聞いたのです。来年の黄沙が心配です。黄沙の発生は大草原の凍結が春になって溶けると砂が水蒸気と一緒に舞い上がるところから始まります。



一冊の書籍「奪われし未来 (Our Stolen Future)」はアル・ゴア (Al Gore) が米国副大統領時代に序文を書きましたが、女性の動物学博士シーア・コルボーン (Theo Colborn)の著作です。

「奪われし未来」は、当時 30 年前大学で生物学を学び漁業局の公務員であった同じ女性のレイチエル・カーソン (R a c h e l C a r s o n) の「沈黙の春 (Silent Spring)」を人々に思い出させました。

“沈黙の春”の文章の冒頭句は「あら、今年の春は森で小鳥が泣かないわ？」である。

「沈黙の春」の内容は合成殺虫剤 (DDT) が虫を退治し、虫を餌に

していた小鳥達をも絶滅させた。殺虫剤は虫や小鳥だけでなく、合成殺虫剤 (DDT) は人体に蓄積し癌を誘発する化学物質であると警鐘の鐘を鳴らしました。

「奪われし未来」以来環境ホルモンという用語」がさかんに叫ばれるようになりました。「公害」と「環境ホルモン」の違いは公害は加害者と被害者の区別がはっきりしているのに対し、環境ホルモンの問題は加害者と被害者の区別がなく、加害者も被害者、被害者も加害者というやっかいな複雑性が存在していることです。

また環境ホルモンの問題は一国にとどまらず、世界中に広がりつつあります。環境は人間と自然界が相互作用を及ぼしあう場であり、人間だけの我がままが許されなくなっています。人間、生物が生きているということはミクロの目でみると、化学物質同士の反応であり、人間の体内の器官から生み出されるホルモン (脳下垂体・甲状腺・性) も化学物質であり、大気中の有害化学物質と自覚症状なしに体内で化学反応を起こしているということです。

現在の中国経済成長率はいくら国策といっても、水・空気・医療制度と医療施設が日本とあまりにも違いすぎるからである。インフラ整備から環境整備 (含む医療設備) に移行すべきと思う。そうすれば中国

の大学生の雇用機会が増えると思います。

私が 48 年前の 17 歳の時アメリカの 35 代大統領 J・F Kennedy は大統領就任演説で言いました。

「In the long history of the world ,only a few generation have a granted the role of defending for maximum danger ,I do not shrink this responsibility. I welcome it.」

「世界の長い歴史において、ほんの僅（わず）かの人だけが、何が一番危険であるかを知っている。私はこの責任を逃げない。歓迎してあげる。」と言ってキューバにソ連の軍事基地を作ろうとしたソ連のフルヒチョフ首相と対決しました。

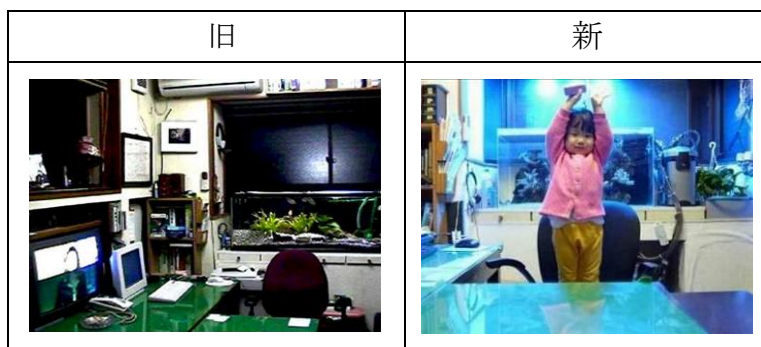
「ギリシャの使者からの手紙「ギリシャの属国になりなさい、そうすれば厚遇する。しかしそうでなければ攻撃をするぞ」と恫喝されたがスパルタ国の国王は一喝の“ I F”という書面で返事を書いた。ギリシャはスパルタを攻めなかった。

J・F Kennedy の言葉は「古代スパルタ国の武士道精神」であり「日本の武士道精神」と共通しています。結果としてキューバに基地を作らせなかった。このことを「キューバ危機」という。

（私は大学の教授のように同じことを繰り返し学生に伝える職業ではありません。実務の前線で“民事再生”すべきか“破産勧告”すべきか“病院に入院”させればいいか・・・の相談の客が毎日来ます。従って、今月の後半の土曜日・日曜日で急遽（きゅうきょ）書き上げました。コピー機でコピーすれば私の意図が理解してくれると思ったからです。私は相談者の危機がすぐわかります。電話の声・あった時の目の動き・・・心のゆとりはあるが処理の時間がないのです。）

私は気分転換と中国のとても若い美人の“華人”が来るので書斎の水槽を変えました。名を華ちゃんと言います。

（彼女の日本語名を“華 はな”ちゃんと命名したのは、私であります、2 歳です。“華 はな”ちゃんは純粋な汚れのない“華人”です。）



本当に“華”ちゃんのような“華人”が将来日本と中国の友好の親善大使になって欲しい。“華”ちゃんは私に会うと「爷爷 お爺ちゃん」と言って私の膝の上に座る。你的日本的爷爷就是我呀。明白了么？

“華”ちゃんの日本のお爺ちゃんは私ですよ、解りますか」と聞くと「明白 わかります」と答えます。そのあとすぐ中国人の母親に「尿尿 おしっこ」という。私の中国語は2歳の中国人にも通じるようになりました。

第六章 終章 「青春」とは？

私は2000年から2010年まで本当に短いが充実した生活を送ることが出来ました。2000年には飛行機嫌いの私をO社のK社長がサンフランシスコに連れて行きました。また、M放送局のMさんに連れられ、初めて北京に行きました。

その間“ナノテク技術の新炭の学習”→“中国の政治の仕組み、文化等の学習”→“中国語の独学”→“食用油の排油を機械油に利用する技術の学習”→“新建材としての畳の学習”→“世界の常識を変える”新上水理論の学習“→”中国での日本酒開発の学習“→”中国での医療の現状の学習“・・・これだけの私に仮

想「中国大学卒業論文」のテーマを与えてくれた大学はないと思う。

また仮想「中国大学」は私と中国人所謂「私の義憤心の葛藤（かっとう）大学」でもありました。「このような大学は世界中どこを探してもない（私のような中国体験者はまずいない。）」と思う。お金も使いました。

（下図は私が 10 年前アメリカのシリコンバレーに行き、すぐに中国に行ったとき飛行機内でイメージして作った図です。）

私見による「アナログ（コンピューターが苦手な人）の世界」と「デジタル（コンピューター得意な人）世界」の想定図



私のホームページは <http://south.jp> 右から読めば、日本国・南淵です。このドメインは世界で一つです。私の生活信条は「努力に勝る天才なし、稼ぐに追いつく貧乏なし、笑う門に福来たる」です。

最後に詩をよんで寝ましょう。

「青春」

原作 サミエル・ウルマン 邦訳 岡田 義夫

「青春とは人生のある期間を言うのではなく、心の様相（ようそう）を言うのだ。優れた創造力、逞（たくま）しき意志、炎（も）ゆる情熱、怯懦（きょうだ）を却（くだ）ける勇猛心、安易を振り捨てる冒険心、こう言う様相を青春と言うのだ。年を重ねただけで人は老いない。理想を失うときに初めて老いが来る。歳月は皮膚のしわを増すが、情熱を失う時に精神はしぼむ。

苦悶（くもん）や狐疑（こぎ）や、不安、恐怖、失望、こう言うものこそ恰（あたくも）長年月の如く人を老いさせ、精気ある魂をも芥（あくた=塵（ちり））に帰せしめてしまう。

年は七十であろうと十六であろうと、その胸中に抱（いだ）き得るものは何か。曰（いわ）く、驚異への愛慕心、空にきらめく星辰（せいしん）、その輝きにも似たる事物や思想に対する欽仰（きんげい）、事に処する剛毅（ごうき）な挑戦、小児の如く求めて止まぬ探求心、人生への歓喜と興味。人は信念と共に若く 疑惑と共に老ゆる、人は自信と共に若く 恐怖と共に老ゆる、希望ある限り若く失望と共に老い朽（く）ちる。大地より、神より、人より、美と喜悅、勇気と壮大、そして偉力の靈感を受ける限り、人の若さは失われない。これらの靈感が絶え、悲嘆（ひたん）の白雪が人の心の奥までも蔽（おおい）いつくし、皮肉の厚氷（あつごおり）がこれを堅くとどすに至れば、この時にこそ人は全く老いて、神の憐（あわ）れみを乞うる他はなくなる。」

本年9月中旬から、9月、10月の土日、休日を含め約25日間で書きあげました。そのあと11月休日に遂行しました。晩安（おやすみ）



南淵請安は 645 年の「大化の改新」に深く影響を与えました。

2010/10/30 2010/11/14 2010/11/23 文責；南淵弘昭